
Blue Rain

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l u e R a i n

【Nコード】

N 7 6 8 3 D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

別れたその夜。俺は一人雨の世界を彷徨っていた。ただあてもなく御前との思い出に浸りながら。チェッカーズシリーズ第二十七弾、中期のシングルです。チェッカーズのバラードでも屈指の名曲です。

第一章

Blue Rain

どれだけ彷徨ったかわからない。雨が降る夜を。

俺はただひたすらその夜彷徨った。雨の中傘もささず。

夜が終わっていくのがわかる。けれど俺の心は夜のままだった。

それは終わらない。

「行くか」

俺はふと思い引き返した。あいつの家に。

元はと言えば俺が悪かった。俺が自分勝手に別れ話を持ち出してそれで俺達は別れた。

別れた理由は俺が自由になりたいからだだった。それで出て行くと言った。あいつは必死に止めたら俺は家を出た。ずっと一緒に住んでいた家を。

正直束縛の多い女だった。何時ここにいろだの何をしてくれだの。そうしたことがいい加減な俺には嫌だった。それで別れた。本当に俺の勝手だ。

別れてから三日。俺はずっと寂しがってる自分に気付いた。これも勝手な話だ。自分から別れておいてこんな気持ちになるのは。俺は自分の我儘さに内心苦笑いさえ浮かべた。

「もう閉店ですよ」

ずっと飲んでいたバーでマスターにそう言われた。気付けばかなりの量の酒も飲んでいた。

「あれ、もう」

「ってかなりの時間ですよ」

マスターは苦笑いを浮かべて俺に言ってきた。洒落た木造の店の中にいるのは俺とマスターだけだった。元々静かな店が余計に静かに思えた。

「ですから」

「ああわかったよ。それじゃあ」

「それに随分飲んでますね」

カウンターの席から立ち上がる俺の足がふらついているのを見てまた言ってきた。

「大丈夫ですか？」

「酔うなら酔えばいいさ」

俺はマスターの気遣いに対して自嘲気味にこう返した。

「それでな」

「そうですか」

「じゃあお勘定」

俺はふらつく足取りで財布を出した。そうして金を払って店を後にした。それからずっとこの雨の中だ。傘もささずにずっと一人で街の中を彷徨っている。

第二章

俺の方から別れを切り出して。俺の方から出て行ったのに。

それでも寂しい。人間なんて勝手なものだ。

一度家の前まで戻ってドアを叩いた。けれど返事はなかった。

「いないか」

家の中から気配は感じなかった。何処かに出ているらしい。けれどすぐにそれでよかったと思った。

「今更な」

雨の中で自嘲で笑った。俺に対してだ。

「許してもらおうとか会いたいとか。俺も勝手だよ」

それがわかったからその場を後にした。ふらりとまた彷徨いだした。

あてもなく歩き続け身体が冷えていく。その中で胸に下げているものに気付いた。

「あいつがくれた」

十字架だった。あいつが俺の誕生日にくれたものだ。そつと手をやって握ると完全に冷え切っていた。今の俺と全く同じようにだ。

十字架を握りながら目を閉じるとあいつの顔が思い浮かんだ。やっぱりそれと同じだった。

俺はその冷たい十字架を握り締めながらまた歩きはじめた。線路の下で落書きも滲んで暗がりの中で何て書いてあるかわかりはしない。だがそれが少し見えるようになってきた。

「夜が完全に終わるんだな」

それがわかった。世界が少しずつ白くなっていく。けれど雨はそのままだ。ずっとそのままだ。夜明けになっても雨音が聴こえてくる。俺はそれを聴きながら道の端にしゃがみ込んだ。濡れてももう構わなかった。とつくの昔に濡れそぼってどうしようもなくなっていたからだ。

「もういいさ」

諦めた声で言った。

「濡れてもどうなっても。ただ」

雨の中でもよかった。眠りたかった。後はどうなってもよかった。

「寝るか」

俺はまた呟いた。そのまま雨の中目を閉じる。そのまま眠りに入る。

雨音の中何かが聞こえて来る。それは足音だった。それが誰のものかはわからない。そんなことはもうどうでもよかった。

「俺が全部悪かったんだ。全部」

「ええ。けれど」

最後にその声を聞いた。後は覚えちゃいない。青い雨が俺を濡らしていたがそれが何かに防がれるのを感じながら俺はその雨の中で泥の様に眠りに入った。何かに包まれるのを感じながら。

B l u e R a i n

完

2 0 0 7 ・ 9 ・ 2 1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7683d/>

Blue Rain

2010年10月10日11時00分発行